



近世生野地域の俳壇と森垣村石川家

井上, 舞

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 53:51-76

(Issue Date)

2026

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503524>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503524>



近世生野地域の俳壇と森垣村石川家

井 上 舞

はじめに

本稿では、近世生野地域の俳壇について取り上げる。近世期の播磨・但馬は俳諧の盛んな地域であった。俳聖・松尾芭蕉の高弟やその流れを継ぐ俳人、蕉風俳諧復興に努めた俳人らは、芭蕉に倣って各地を旅し、播磨・但馬にも訪れている。また、現地の俳人たちも積極的に彼らに教えを請うた。やがて同好の士によって、各地で俳諧社中が結成されていた。俳人たちはときに一堂に会して連句を巻き、俳書を編み、俳額を奉納し、あるいは書簡や旅を通じて全国各地の俳人と交流した。播磨・但馬の狭間に位置し、幕府の要衝たる生野銀山を抱える生野地域¹においても、墓塚や芭蕉塚といった、いわゆる芭蕉顕彰碑が残ることから俳諧が盛んであったことがうかがえる。しかし、これまで、播磨・但馬地域の俳諧史において生野地域が中心に取り上げられることはなく、これまでその実態は不明な部分が多かった。

近年の調査で神西郡森垣村（現・朝来市生野町）の豪農・石川家に残された資料から、多数の俳諧関係資料が見された。本稿ではこれらの資料に拠りながら、生野地域における俳諧活動の実態を明らかにしていくことを目的とする。具体的には、森垣村石川家の二代当主で、文化・文政期における当該地域の俳壇の中心的存在であった俳人・石川安登里²の活動に着目し、生野地域での俳人の活動実態や周辺地域との交流について明らかにしていきたい。

一 安登里以前の生野地域の俳壇

まず、播磨・但馬両地域の俳諧史を概観した上で、安登里以前の生野地域の俳壇について確認しておきたい。

播磨は歌枕として知られる場所も多く、松尾芭蕉が『笈の小文』の旅で明石を訪れたのをはじめとして、名だたる俳諧師が訪れた地域である。こうした経緯もあってしぜん俳諧も盛んであったが、そうした中であって十八世紀頃から播磨各地に多大な影響を与えた俳壇に、姫路の風羅堂と加古川の栗の本がある。

風羅堂は、元禄十五年（一七〇二）に芭蕉の直弟子の広瀬惟然が播磨を来訪し、そこに当時姫路を中心に活動していた井上千山を筆頭とする俳諧集団が入門したことに端を発する。千山は惟然より芭蕉の遺品を譲り受けていた。千山亡き後、子の寒瓜はそれらの遺品を納めるための堂を建て、惟然が管理していた京の芭蕉の草庵にちなんで「風羅堂」と名付けた。風羅堂には多くの門人があり、その弟子たちは姫路を中心に播磨各地で活躍した。また、もと姫路藩士で、藩を放逐され諸国遍歴する中で江戸で俳諧を学び、後に加古川に拠点を構えた蕉門中興俳諧六家の一人、松岡青羅を一世とする栗の本も、明石の蛸壺塚の建立をはじめ積極的に芭蕉の顕彰に努めている。栗の本の門人は加古

川だけでなく播磨各地で後進を指導し、俳壇を形成した。

富田志津子氏はこうした播磨各地の風羅堂・栗本系俳人について丹念に調査を行い、著者『播磨の俳人たち』をはじめ『姫路市史』や『加西市史』等において、各地の俳人たちの活動実態を詳述している³。この他にも播磨各地の自治体史や地域史研究者による調査が進められ、播磨の俳人、奉納俳額、俳書などについての研究が蓄積されている⁴。

一方、但馬地域では、まず『兵庫県史』が一八世紀後半頃の俳壇として、二方郡浜坂（現・新温泉町）や同湯村（同）、竹田（現・朝来市和田山町）などを挙げている⁵。また『大屋町史』によれば、但馬地域で俳諧が流行し始めたのは播磨よりやや遅れた安永年間頃で、この時期に浜坂・出石の辺りに俳諧社中ができ、その流れは山陰道の宿場駅沿いに広がっていったとする。特に浜坂・湯村の周辺では、与謝蕪村の弟子である高井几童に師事した森田因山が、近隣の農村を巻き込んだ俳壇を形成し、多くの俳書を残している⁶。和田山周辺でも、この時期百名を超える俳人がいたとされ、蕉風俳諧の復興に努めた五升庵蝶夢に師事した魚潜や、播磨の栗の本一世・青羅や同二世玉屑に師事した巨山を中心に、活発な活動が展開されていた⁷。また先述の『大屋町史』は町内の奉納俳額について詳細な調査を行っており、当該地域のみならず周辺地域の俳人たちが奉納俳額に投句していることを指摘している。

このように十八世紀から十九世紀初頭にかけての播磨・但馬地域では、広く俳諧が流行していた。しかし、どちらの地域の俳諧史も生野地域に言及したものは少ない。姫路の風羅堂・加古川の栗の本を軸に展開する播磨俳壇史において取り沙汰されるような生野の俳人は少なく、また両社中の影響下にある大きな社中はなかった。一方、但馬地域においても、浜坂・養父・和田山など各地域の俳諧資料の中に生野の俳人が散見するものの、生野地域を個別に扱っ

た研究はない。地理的な問題もあつて、播磨・但馬の国境にある生野地域は双方の俳諧史の目に届きにくいということもあるのかもしれないが、そもそも生野の郷土史においても俳諧について取り上げたものは多くない。⁸幕府の要衝たる生野銀山を擁する当該地域では、しぜん銀山やこれを管轄する生野代官についての研究に主眼が置かれがちで、そうした事情もこれまで生野地域の俳壇が注目されなかった一因といえよう。

では、俳諧の流行は生野地域に及んでいなかったのかといえ、決してそうではない。貞門俳諧期の四大俳書の一つ『玉海集』には、生野から「中嶋安永」「寺田豊重」「尾崎貞則」「寺村貞行」「進藤重光」「竹屋勝利」「長野桑秀」「毛利正長」「土肥義也」「土肥雪之」「松本吉屋」の十一名が入集している。これらの俳人の素性は不明ながら、同時期の生野銀山の抱役人のなかに「寺田」「長野」姓の役人が確認できる。右に挙げた俳人と銀山の役人が同一人物であるかどうかは断言できないものの、同姓であることから何らかの関係はあったと考えられ、生野代官所の役人や銀山町の商人の間で貞門風の俳諧が流行していたことをうかがわせる。このほか、貞門・談林俳諧期の俳諧作者を網羅的に把握した今栄蔵氏の『貞門談林俳人大観』⁹には、先の『玉海集』を含め、四十名以上の生野地域の俳人が確認できる。

次に、蕉風俳諧復興の気運が高まっていた十八世紀中期以降の生野地域の俳壇について確認しておきたい。この時期の生野俳壇において特筆すべき人物は、風羅堂に属した俳人・孤松亭寒秀である。寒秀は風羅堂三世・寒瓜の高弟で、寒瓜が編集した千山の追悼集『五々の冬』『蓑のいしぶみ』等に入集するほか、自らも寒瓜還暦の祝賀の俳宴をまとめた『花実卷』の編者となっている。¹⁰また寒瓜が寛保三年（一七四三）の芭蕉五十年忌に編んだ追善集『雪の棟』には、酒見北条（現・加西市）、室津（現・姫路市）など播磨をはじめ、各地の風羅同一門の連から追善連句

が寄せられている。生野からも孤松亭寒秀を筆頭に、寒笠、寒厄、舟宣、五隆、李紅、胡秀、素雪、千国の九名が確認できる。¹¹

ところで寒秀は、これらの俳書で「生野 寒秀」「但馬生野 孤松亭寒秀」などと記されているが、実際には播磨国神西郡森垣村の人であった。森垣村石川家の過去帳によれば、寒秀は実名を市橋久兵衛という。妻も「鳥紅」の俳号を持ち、その子・万蔵も俳諧をたしなみ、俳号を「文眠」といった。¹²市橋家は屋号を「亀屋」といい、森垣村の庄屋も務めた家で、生野銀山の久林山を稼業していた山師でもあった。生野銀山関係資料には、しばしば久林山の山師として久兵衛の名がみえる。このことから、寒秀は寒瓜の高弟として風羅堂に拠点をおいて俳諧をもっぱらにしていたのではなく、森垣村に居住し、生業の合間に俳諧にいそしんでいたことがわかる。なおかつ『雪の棟』の入集状況からもうかがえるように、生野における風羅堂一門の俳人たちの指導者的存在でもあった。なお、後に寒秀は金沢出身の俳人で京に芭蕉堂を構え、蕉風俳諧復興に努めた蘭更の門に入ったとされている。¹³

もうひとつ、生野地域における俳諧の興隆をうかがわせるものに、蓑塚がある。蓑塚とは、芭蕉ゆかりの蓑の欠片を埋めて供養したもので、類似の塚が全国に残る。姫路の風羅堂でも、千山が惟然より譲り受けた芭蕉の蓑の一部を塚に納め、蓑塚として供養している。生野地域の蓑塚は、生野銀山町の寺町に所在する浄土宗寺院・来迎寺に残されている。所伝によれば、寛政八年（一七九六）に後の栗の本二世となる玉屑が生野に来訪した際、当地の門人・青々庵竹也に芭蕉ゆかりの蓑の端を与え、これにより竹也が同門と協力して塚を立てたとされる。¹⁴竹也の素性は定かではないが、この時期の生野地域では、風羅堂系だけでなく栗の本系の俳人も活動していたことがわかる。

これとは別に、森垣村の真言宗寺院・龍上山延応寺にも芭蕉塚が残る。この塚はもともと寺に隣接する金刀比羅神

社の参道からはずれた山林の樹下にあり、現在は境内の鐘樓の隣に移されている。こちらは表に「芭蕉塚」、裏面には芭蕉の忌日である「元禄甲戌（筆者注・元禄七年）十月十二日」と刻まれている。昭和三十年（一九五五）にこの下を発掘したところ、中身は朽ちていて判別できなかったものの、丹後焼の壺と楽焼の鉢が出土している。¹⁵ 全国の芭蕉塚を調査した田中昭三氏によれば、芭蕉関連碑の多くは十八世紀後半の蕉風俳諧復興期以降の建立とされる。¹⁶ 生野地域は特に芭蕉とゆかりの地というわけではない、この塚も芭蕉没後すぐに建てられたものではなく、古くとも蕉風俳諧復興期にかかるものと思われる。とはいえ、こうした塚を作ろうとした人々が当時の生野地域に存在していたというのは、当地の俳諧の隆盛を考える上で重要であろう。

また但馬の俳書からも生野地域の俳人の活動が確認できる。先述の和田山の俳人・魚潜が芭蕉百回忌にあたる寛政五年（一七九三）に編集した『芭蕉翁』では、生野から寒秀の子「文眠」をはじめ、「袴仙」「涼秀」「義風」「諸香」「兎雪」「里蝶」の六名が入集している。次いで、寛政七年に和田山の俳人・可休の追善句集として編まれた『苔の花』には「弄花」が、同八年の『遊免農枕集』には生野から「涼秀」「桃李」「兎雪」、播磨国森垣村から「文眠」が入集している。¹⁷ このほか、文化三年（一八〇六）に湯村（現・美方郡新温泉町）の因山が編集した『三日の月影』に、「生野 涼秀」と「播州 あとり」つまり石川安登里が、文政元年（一八一八）に平野（現・美方郡香美町小代区）の花月庵呉柳が編集した『根長草』に「播森垣」より「東湖」と「あとり」が入集している。¹⁸ なお、東湖は安登里の実弟で、実名を石川伊兵衛両中という。

このように、各地の俳書の入集状況や、芭蕉顕彰碑からも、生野地域でも古くから俳諧が好まれていたことがうかがえる。一つ特徴的なのは、寒秀や文眠のような播磨国神西郡森垣村の俳人たちが、「生野」の俳人として入集して

いる点である。森垣村の住人が居住地を「生野」と記す傾向は、俳諧関係以外の史資料からも確認できる。近世期の生野鉾山では、鉾山を取り囲むように銀山町が形成され、出入口には番所が置かれて人やモノの動きが制限されていた。但馬国に属する銀山町に隣接し、また姫路から日本海に抜ける生野街道筋に位置する播磨国神西郡森垣村は、播磨側から銀山町に入る播磨口番所に接しており、播磨と生野鉾山を行き交う人や物資の結節点としての役割を与えられていた。銀山町と森垣村はそれぞれ但馬と播磨に属しているとはいえ、両者は不可分であり、森垣村の人々はこうした事情から、居住地を「生野」と書く場合もあったのだらう。本稿ではこうした地理的特性を踏まえつつ、但馬国生野銀山町および播磨国神西郡森垣村を中心に形成されていた俳壇を「生野俳壇」と呼んでおく。

二 森垣村俳人・石川安登里とその周辺

前述のように、十八世紀中葉以降の生野地域では、風羅堂の高弟が居住し、また芭蕉ゆかりの養塚が建立されるなど、蕉風俳諧復興に乗じた俳諧活動が展開されていた。そうした中で、生野地域内外で俳人として活躍し、文化・文政期の生野俳壇の中心的存在であったのが、石川安登理である。

石川家は龍野に出自を持ち、屋号を龍野屋という。近世中期頃までは姫路で商売を営んでいたようであるが、十八世紀末に姫路石川家五代・守毎の長男・布堯が神西郡森垣村に居を移し、以降、銀山町の掛屋津田家をはじめ、銀山町や森垣村などの有力層と縁戚関係を結び、諸商売で財をなして同地での地盤を固めていった。同家は、薬種商を営んでいたと伝わるが、調査によって確認された資料からは、薬種商にとどまらず、市川流域を中心に広大な土地を所

有し、旗本への融資や生野銀山の運営に関わる諸業務など、周辺地域の中で様々な役割を果たしていたことがわかっている。¹⁹

安登里は布堯の三男で、実名を石川伊兵衛長英という。石川家の当主は代々「伊兵衛」を名乗り、隠居すると「庄左衛門」と名乗っていた。同家の過去帳より、布堯が森垣村に居を構えたのは明和から天明にかけてのこととみられ、天明三年（一七八三）に家督をまだ十代の長英に譲っている。長英は長らく当主を務めたが、文政四年（一八二一）に銀山町の掛屋・津田家を相続していた弟・両中を石川家に呼び戻し、家督を譲っている。ただし、石川家文書の借用書・金融関係等の文書中には明らかに長英を指す「石川庄左衛門」や「御隠居」宛の文書も多く残り、隠居後も天保八年（一八三七）に亡くなるまで、長く石川家の経営に関わっていたようである。同家に残る長英の肖像画に付された讀には、布堯が行った山林・田地の開発を継承し、家業を発展させたことなどが記されており、森垣村石川家の生野地域における地盤を確立させた人物といえる。また長英は、安登里の俳号のほかに、「不染斎雀翁」の画名を持っていた。現在残る作品は、その画名にふさわしく雀ばかりである。そもそも安登里という俳号も、スズメ目アトリ科で雀によく似た「アトリ」（花鶏・鴝子鳥）という野鳥にちなんだものと思われ、よくよく雀を好んでいたようである。

長英が俳諧に傾倒しはじめたのは、いつ頃のことだったのだろうか。石川家に残る過去帳には、実名、戒名、命日などの他に、俳名も並記されている。ここから、同家の人々の多くが俳諧をたしなみ、俳号を有していたことが知れるが、布堯の俳号は記されていない。現存する石川家の俳諧資料の中にも、布堯関係のものは確認できない。たしなむ程度のことはしていたかもしれないが、少なくとも布堯は本格的に俳諧に取り組んでいたわけではなさそうであ

る。むしろ長英にきつかけを与えたのは、父ではなく、森垣村の俳人で、風羅堂の高弟であつた寒秀ではなかつただろうか。

石川家の過去帳は、血縁者のみならず懇意にしていた人々についても記載している。寒秀の名もあり、そこには以下のように記される。

寛政六酉十一月廿四日

松樹院天龍宗雲居士

俗名市橋久兵衛

俳名寒秀

行年

寛政十戊午年九月廿八日

智光院恵照鏡雲大姉

同人妻

俳名鳥紅

行年

右者津田城之助至而懇意ニ付、元來城之助年頃殊ニ諸向達人ニ而何用寒秀父ヨリ厚懇頃ニいたされ、然ル処城之助何文段々こんキウニ付、娘かつ大坂親類江遣し可申折から、寒秀父達而御とめ、しはらくかめやニ而世話ニ而相成候内、石川氏へ縁談仕候、其由緒ヲ以かつヨリ始メ石川布堯ヨリも大切ニねんころ、廿四日松樹院ノ

御名日ハかつ一代月々通夜ノ晩ニは御宮ヲ為拝遣候、引続跡々入魂仕追々石川より市橋氏こんキウニ付諸事世話ヲいたし又今ねん頃仕候

津田城之助とは銀山町の掛屋である。寒秀と城之助は日ごろ懇ろに付き合っていたが、津田家が困窮のため娘かつを大坂の親類に預けようとしていたところ、寒秀の父がそれを留め、「かめや」つまり市橋家でしばらく世話をした後、石川家に嫁がせたとある。かつは、森垣村石川家初代布堯の妻である。さらに布堯もまた、このために市橋家を懇ろにし、寒秀亡き後の命日にはこれを弔い、その後市橋家が困窮するようになってからも何かと世話をしたと記されている。新参者の石川家にとって、銀山町の掛屋と縁戚関係を結ぶことは、同地で地盤を固めていくための大きな契機であった。これ以降、市橋家と石川家の間で婚姻・養子等の縁組は確認できない。ただし、寒秀から数えて三代目の市橋家当主・伊三郎は、丹波足立家からの養子であるが、幼少期は石川家で養育されており、市橋家・石川家の関係の深さをうかがわせる。なお、丹波足立家は長英の妻をはじめ、石川家と婚姻、養子縁組を繰り返しており、強い姻戚関係にあった。あわせて、こうした両家の歴史を語る文脈、実名の市橋久兵衛ではなく「寒秀」という俳号で表記するあたり、俳諧を通じた交流の深さを垣間見ることができる。

もうひとり、長英と俳諧を結びつけた人物として挙げられるのが、風羅堂の芭蕉五十年忌追善集『雪の棟』にも入集していた寒庵である。こちらも過去帳に記載があり、次のように記されている。

此方先祖ヨリ鎮西流候得共、当所森垣村ニ而西山流西福寺旦那近所ニ当り御座候間西福寺江相成候様亀屋吉右衛門殿達而被頼申候二付、住其意西福寺江相附申候

世話人

亀屋吉右衛門観泰

俳名寒厄

同人寛政四年子六月五日死去

子年二而七十六歳齡

法名

一誉今信心信士

右英宣和尚様代者僧也

明和亥年二御遷化

石川家は先祖代々鎮西流の浄土宗寺院に属していたが、森垣村付近には同流の寺院はなく、檀那寺を変えるにあたって亀屋吉右衛門の口利きで西山流の西福寺に加えてもらったとある。吉右衛門は引用の最後にあるように、西福寺和尚の代役を務める人物であったようである。

また、同じ過去帳の長英の項には「名親羽瀧吉右衛門寒厄」とみえる。羽瀧吉右衛門については、現在のところ過去帳以外の資料に見えず、その素性は定かでない。いずれも「亀屋」を名乗っているものの、羽瀧吉右衛門（寒厄）と市橋久兵衛（寒秀）では苗字が異なっているし、血縁関係であったことを示す資料も今のところ確認できていない。ただ、『雪の棟』の入集状況や俳号の「寒」が共通していることから、両者とも風羅堂三世寒瓜の弟子筋であったことは確かである。

もうひとつ、過去帳には安登里と弟・東湖の俳諧の師についての記載がある。

文化五年戊辰七月二日

大観房宣明

俗名利庵葵

右俳諧の宗匠青島東湖の先生也依之記

「青島」とあるが、これは安登里のことであろう。後掲の『こがらし集』にも安登里が名利庵葵を師としていた旨が記されている。

名利庵葵については『あか冠』『花の三歌仙』『甕迫善集』などの俳書を編集していることがわかっている。²⁰このうち『あか冠』の序は、金沢の出身で後に京に芭蕉堂を構え、蕉風俳諧復古運動に邁進した俳人・高桑闌更によるものである。大河蓼々氏の『加能俳諧史』によれば、闌更が毎年編集していた歳旦集『花供養』について、天明九年（一七八〇）にあふひ（葵）と協力して編纂したとあり、また闌更七回忌に闌更の妻得終尼が追善俳席を営んだ際のこととして「同日あふひ法師は病んで席に列するをえず名利庵に正式俳諧連歌を張行して霊前に具へた」と記されており、²¹闌更の高弟ではなかったかと推測される。

風羅堂寒瓜の高弟であった寒秀は、後に闌更門に入ったと伝えられる。過去帳にみる石川家と市橋家との関係、寒秀の闌更門への入門、安登里と東湖の闌更門流に属する名利庵葵への入門からすれば、森垣村に移住した石川家は、ここで寒秀・寒厄らの俳諧に触れ、若き当主長英と弟の両中もまた、俳人としての道を歩み始めたと考えられる。

もう一人、長英と生野俳壇との関わりを考える上で注目すべき人物が、過去帳に記されている。

御代官恩田新八郎様御手附元締

結城五郎作様ノ御童女

御名おたみ様

御年四才

右者あとり長英結城様ト出入ヲいたし候俳友ニて、至而御ねん頃ニ付記ス

結城五郎作は、生野代官恩田新八郎の配下で文化六年（一八〇九）頃に生野に赴任している。石川準吉の『生野銀山と生野代官』に「（元締手附）結城五郎作（普請役）（手附、公事方、加判、普請役格）」とみえ、恩田が離任する文化十二年（一八一五）頃まで生野に滞在していたと考えられる。

五郎作は前赴任地の中之条（現・長野県埴科郡坂城町）で俳諧を学んで停雲舎雅重と号し、転勤してからも信州上田の俳人たちと交流を重ねていた。生野に赴任直後に信州の俳人・雲帯に宛てた書簡が残っている。そこには、「当所（筆者注・生野）も俳諧流行いたし当時連中二十人余も有之、定会杯も相立居候。」とあり、当時の生野俳壇の活況をみてとることができる。雅重は生野で「停雲社中」を結成し、俳諧刷物も作っていた。生野地域では現物を確認することができる。また妻も「花林」という号を持つ俳人であった。²⁴

その結城五郎作が生野で失った娘の名を、石川家は「ねん頃」に過去帳に記している。生野俳壇の中心的存在であった寒秀は、寛政六年（一七九四）に亡くなっている。そうした中信州からやってきて、短い期間ながら、自ら社中を結成し、生野俳壇の中心的存在として積極的に活動していた五郎作こと雅重の姿は、長英が俳人・安登理として活動していく、一つの示唆を与えたのかもしれない。

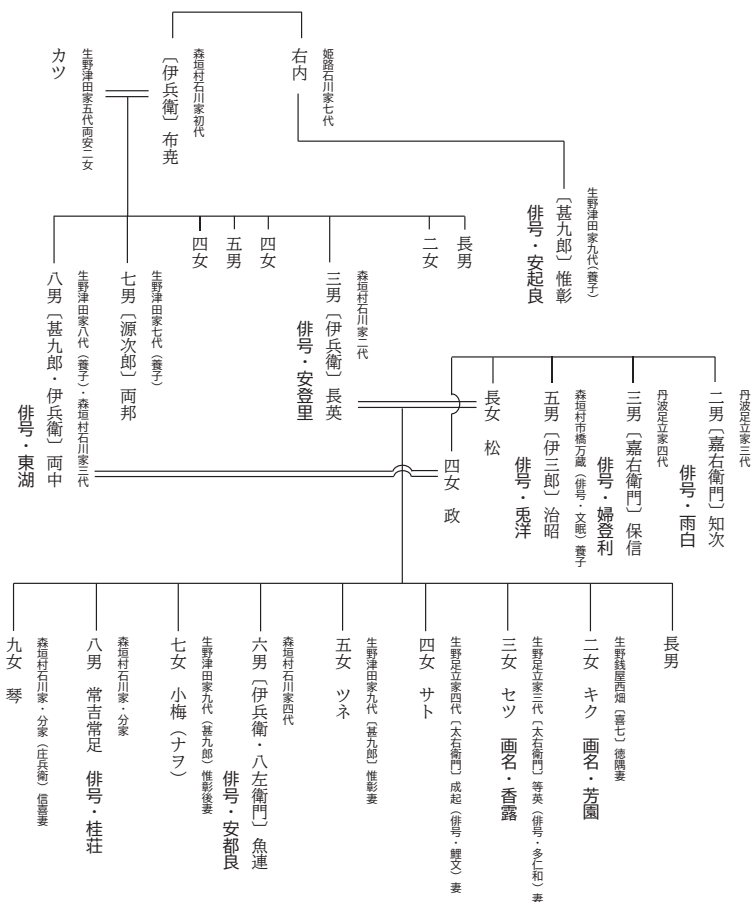
長英の俳諧熱は、一族にも影響を与えている。長英が安登里、その弟・両中が東湖の俳名を持つことは既に述べた。このほか安登里の子で四代当主となった八左衛門魚連は「安都良」、長英の甥で、両中が石川家に戻ったのち生野銀山町の掛屋津田家を継いだ惟彰は「安起良」の俳号を持つ。「安」を共有していることから、魚連・惟彰は安登里から俳諧を学んだのであろう。

また、石川家と血縁関係にある一族も多く俳諧をたしなんでいる。「森垣村石川家系図」は過去帳に拠りながら、石川家を軸に、同家と婚姻や養子縁組を通じて関係のあった人々を追記したものである。石川家は丹波の足立家および生野銀山の大山師・生野足立家と婚姻関係を結び、また銀山町の掛屋津田家には前述のように布堯の子や甥が養子に入り、そこに長英の娘が嫁ぐなど、強固な血縁関係を結んでいた。その長英を取り巻く人々の多くが俳名を有していることがわかる。石川家文書には、石川家単独ではなく、宛先や差出が石川・足立・津田の連名となっている借用証文等が散見する。血縁関係で結ばれたこれらの家が、各家の生業を活かしながら共同経営を行っていたとみられる。こうした関係性を踏まえるならば、俳諧は単に興味の域にとどまるものではなく、一族の紐帯のために機能していた可能性がある。

三 石川家文書の俳諧資料

以上のように、長英は森垣村に移住した後、生野俳壇の中心的人物であった寒秀こと市橋久兵衛や、寒厄こと羽渕吉右衛門との出会いを通じて俳諧をたしなむようになったと考えられる。やがて同好の士は、縁戚関係のあった丹波

森垣村石川家家系図（石川家過去帳91-28をもとに作成）



* [] は通名

* 丹波足立家については、系図作成の都合上兄弟順を並べ替えている。

足立家・生野足立家、そして津田家にも広がっていく。安登里は寒秀がそうであったように、家業に邁進しつつ、同様の熱量で俳諧にも力を注いでいたようで、石川家にはそれをうかがわせる俳諧関係資料が大量に残されている。以下、石川家に残された資料に拠りながら、安登里の俳人としての活動実態をみていきたい。

①短冊類・書簡類

石川家に残る俳諧関係資料のひとつに、大量の短冊がある。多くは安登里をはじめとする石川家の俳人や、近隣の俳人の句であるが、中には淡路や江戸など、遠方の俳人からの短冊も残る。また句の傍らに付された詞書に、還暦等の祝辞が記されていることもあり、俳諧を通じた交流は生野地域とその周辺に限らず、広域に及んでいたようである。また、安登里宛の書翰についても大量に確認されている。

この時期、全国各地の俳人たちの間では句会等で顔を合わせるだけでなく、手紙による遠方の俳人との交流が盛んに行われていた。このため、俳人の人名録が作られるようになっていた。そのひとつが文化十年（一八一三）に刊行された『万家人名録』である。これは「俳人肖像画集としての要素と俳人住所録の要素とを併せ持つ」た人名録²⁵で、掲載希望者から原稿を募り、これをそのまま掲載したものである。肖像画は自身で用意する場合もあれば、おおよその風貌を伝えて版元側の絵師が描くこともあったという²⁶。

この試みに安登里も参加している。『万家人名録』第三巻には「いさよひや瓢をぬすむ人のかを」という句とともに、羽織袴姿で扇子を膝杖にし、傍らに小刀を置いた安登里の姿が描かれている。肖像画の傍らには絵師と思われる「北慎」の署名があり、詞書には「姓石川名長英号龍台俗称伊兵衛住于播州神西郡森垣郷」と記されている。なお、次の丁にはもう一人、生野地域から「姓秋山名富元号鷺亭俗称元三郎但馬生野銀山人」の俳人・泰山が、神姿の肖像

画と「はつゆきを我ものにしてよろこはし」の句とともに掲載されている。『万家人名録』には播磨・但馬地域から多くの掲載者があるが、生野地域からはこの二人のみである。掲載順は原稿が届いた順ということなので、あるいは安登里と泰山は示し合わせて原稿を同送したのかもしれない。石川家に残る遠方の俳人からの短冊や、膨大な書簡類は、こうした交流によってもたらされたものであろう。

また、実際に安登里に会うために森垣村を訪れる文化人もあった。備前の歌人・小川真澄は天保十二年（一八四一）に城崎温泉への旅を思い立ち、その道中、森垣村に安登里を訪ねようとした。このときすでに安登里は亡くなっており希望は叶わなかったが、城崎での湯治の帰り道に真澄は生野に滞在し、姫路屋治介の案内で生野銀山を見学している。²⁷

②蔵書

次に、石川家の蔵書について見ていきたい。石川家には約四百点の蔵書が残されている。蔵書の種類は多様で、四書五経類をはじめ、仏書、辞書、医療関係、算学関係等の版本のほか、幕末の海外情勢や漂流記の写本なども確認できる。俳諧関係はそれほど多くなく、刊本・写本含めて六点であった。²⁸ 刊本の内訳は『芭蕉翁七書』『蕪村七部集』『俳諧漢和／をだまき大成』『柳多留』のような俳書と、『天水良薬抄』のような俳諧指南書である。

このうち写本の『俳諧真式伝』（大本、一冊、四つ目綴、青表紙に朱筆で書題を書き込み）は、「芭蕉行脚御掟」「色紙短冊法」「宗匠式蕉翁伝来密法」「真式俳諧伝」などを書写したものである。後見返しには、

右一冊者蕉風深秘之書也、文政年中龍臺安登里之師蕉門五世宗匠名利庵葵翁

文政五壬午年夏四月中旬於龍臺寫焉

安起良敬写（花押）

と記されている。²⁹ また「色紙短冊法」の末尾に「安不飛書写」とあることから、名利庵葵が書写した本が存在し、これを安登里が書写あるいは写本を譲り受け、さらに文政五年（一八二二）に安起良（津田甚九郎惟彰）が書写したことがわかる。

このほか、厳密には書籍の類いではないが、安登里や東湖の俳諧を書き付けたものを製本し、俳諧作品集のような形に仕上げたもの（「俳諧書上」外①南18―1）、俳諧を作るにあたっての覚書的な「俳諧聞書」（外①南18―39）をはじめ俳諧の書付や、俳諧に関する覚書などが散見する。このほかにも、雑多に俳諧を書き付けた紙片が多く見つかっており、石川家の人々の俳諧への熱中ぶりがうかがえる。

③俳諧摺物

このほか、生野俳壇の人々を中心に編まれた摺物（石川家蔵書内200―41）もある。「追善／茶談蒙」という題簽が貼られた折本形式の摺物で、冒頭に「孤松亭兎羊」の描いた松と安登里の序文があり、続いて「服起俳諧」と題して、「故孤松亭文眠」の句を発句とし、安登里など計三十六名が歌仙を巻いている。序に「文政三年庚寅十一月廿七日逮夜なりき」とあることから、この摺物は文政元年（一八一八）十一月二十八日に亡くなった、³⁰ 文眠の三回忌の追善俳句とみられる。ここに登場する兎羊は実名を市橋伊三郎といい、丹波足立家の生まれで、幼少期を石川家に預けられて過ごし、市橋家の婿に入って三代当主となった人物である。

ところでこの伊三郎については、『生野銀山孝義伝』に逸話が残る。伊三郎は婿養子に入り、市橋家を継いだ。市橋万蔵（文眠）には他に男子があつたが、こちらはすでに銀山町西畑家の養子となり勘兵衛と名乗っていた。万蔵亡

き後、伊三郎は勘兵衛に市橋家の家督を譲り、自分は家を出ようとしたものの固辞された。そこで伊三郎は困窮していた勘兵衛を自家を顧みず支援し、市橋家に住む勘兵衛の実母には土産を持たせ、しばしば西畑家に逗留させた。他方、自分の娘には裁縫のみを習わせ、清貧を貫いた。というものである。この摺物の序にも兎羊と文義（勘兵衛の俳名と思われる）の「二子のまごころ」を歌仙の契機とした旨が記されており、『生野銀山孝義伝』の内容を裏付けるものとなっている。

また、この摺物の末尾に歌仙を卷いた人々とは別に、結縁のためとして「難波の八千房」が句を寄せている。八千房は半時庵淡々門下の舎椿を一世とする大坂の俳諧門流で、最盛期には大坂・河内・大和をはじめ、備中・美作・伯耆・讃岐・伊予・豊前・豊後など西日本一帯に門流を支持する社中を抱えていた。³¹播磨や但馬地域との関わりは、これまで指摘されてこなかったが、養父市大屋町に残る「文化三年宮本天王社奉納発句」の中に「八千房」の名が確認できること、また、前述の『遊免農枕集』にも、八千房が一句入集していることから、八千房は但馬方面の俳壇とも関係を広げようとしていたのかもしれない。

四 生野俳壇の活況―文政三年延応寺俳諧興行と『こがらし集』―

以上の資料からうかがえるように、化政期の生野地域では安登里を中心に、石川家や生野・丹波足立家、市橋家をはじめとして、多くの、生野地域の人々が俳諧に熱中していた。こうした生野俳壇の賑わいが集約された象徴的な資料が、俳書『こがらし集』である。

『こがらし集』は、四つ目綴の半紙本で、全三十二丁。題簽は「こがらし集 全」となっている。³³ 版元は刷られておらず、後見返しに「俳諧集冊・俳諧狂哥御摺物・萬板木師／御銀札・御印判・金銀銅石印／大坂心斎橋筋南本町松井忠藏」の印が押してある。松井忠藏とは、前述の大坂の八千房が刊行する歳旦集『青陽帖』やその他の八千房関連の俳書の出版を請け負っていた摺師である。安登里や東湖は『青陽帖』に投句していたようで、文化四年（一八〇七）に安登里が、文政元年（一八一八）に東湖と安登里が入集しているのが確認できる。³⁴ 先の文眠追善の俳諧摺物に八千房が投句していること、また『こがらし集』にも「五竹庵」（八千房二世・五竹庵木僊）の句が収められていることから、相互の交流関係があったのだろう。『こがらし集』は版本としての質はそれほどよくなく、刷りが所々かすれ、文字が判別しづらい箇所も多い。とはいえ『青陽帖』の発行を通して俳書作成の技術は有していたはずで、かつ俳書の出版をもっぱらにする京・大坂の書肆に比べれば格安で作成することができたと考えられる。松井忠藏版の俳書は、八千房の門流を多く抱える伯耆や豊後にも残されている。『こがらし集』もまた、八千房との交流を通して出版に及んだものであり、生野俳壇のひとつの特徴を示す資料といえよう。

さて『こがらし集』は次のような構成をとっている。①于辰堂八国生の序、②歌仙、③当座、④亡人の句を発句とした連俳、および亡人のみの句による連俳、⑤于辰堂、⑥名利庵への追悼文・名利庵あふひの句、⑦余興、⑧文音、⑨安登里の跋、⑩奥付（松井忠藏印）。また、③と④の間、⑤と⑥の間、⑦と⑧の間に安登里の雀画を含む三点の挿絵が挟まれている。

以下、内容をもう少し詳しくみていきたい。①には、以下のように記されている。

何時にやありけんまたいづれの人にやありけん、産れの異なる石の表にハ芭蕉塚としるし、裏にハ元録^{（マ）}十二庚

戌十月十二日と刻して外に文字なし。これハ老たる人のいひ伝へけるに、こがらし塚となん呼にし。年月はいくそはく経ぬるにや、草茂り小笹生て在処も覚束なかりしをハ、文眠ぬし阿登里ぬしのとしこ芭蕉流の俳諧をハ本意とし遊へるによりて、終にその草むらを探り出して、もろとの好人とともに献茶捻香して俳諧の雅処と定めて、月雪花ほと、きすの折々にハ塚の隣なりける御寺にこそりて春の詠秋の情をハ述るとなん。吾もまた此道に耽るのしれものには侍れと、そここころさしの厚きにかんして彼翁の発句なん探り出て、いとこちたきわさなれとも、脇句をハ打附てつひに歌仙行となし畢ぬ。

文政三庚辰十月十二日於龍上山延応寺興業

はりまの国森垣の里なりける龍台の書窓にしるす

于辰堂八国生 「白文方印（朱印）」

①には、古老の言い伝える「こがらし塚」が、年月を経るにつれその所在がわからなくなっていたところ、日ごろ芭蕉流の俳諧に遊ぶ文眠と安登里が塚を探し出し供養して、ここを「俳諧の雅処」と定め、四季の折々に塚の隣にある龍上山延応寺で俳諧を楽しんでいたこと、「此道に耽るのしれもの」たる于辰堂八国生が安登里・文眠の志に触れ、芭蕉の発句に脇句を付けて歌仙としたと記されている。

延応寺の芭蕉塚については、先に触れたとおりである。①では裏面の文字が「元禄十二年」、干支も「庚戌」となっているが、ここに登場する芭蕉塚は現在延応寺にある塚と同一のものとみてよいだろう。ともかくこの序文から、『こがらし集』は于辰堂八国生が主催し文政三年（一八二〇）十月十二日、つまり芭蕉の命日に同寺で開催した芭蕉の追善俳諧興行で詠まれた句を収載したものであることがわかる。于辰堂八国生については『続俳句講座』収載

の「明治以前俳諧系譜」に三浦樗良の門流として「于辰堂八国生」とみえ、また広瀬淡窓「淡窓日記」文化十年十月十四日条に「浪華俳師于辰堂八国生」³⁶とみえるものの、詳細は定かでない。『こがらし集』では「在森垣」として投句しており、このときは「龍屋」つまり石川家に逗留していたようである。

続いて②では「はせを（芭蕉）」の『猿蓑集』に収められた「こがらしや頬腫痛む人の顔」を発句とし、八国生が脇句を付け、その後安登里以下計十九名が歌仙を巻き、③は当座として「タジマ銀山」「播森垣」を中心に「こがらし」を題材とした五十九名の発句が並ぶ。当座に投句した人々は、生野銀山町から十三名（うち女性三名）、森垣村から十八名（うち女性二名）、また但馬国七味郡（現・兵庫県美方郡加美町村岡付近）、播磨国からは大山・栗賀・福本、比延（以上、現・兵庫県神崎郡神河町）、屋形・澤（現神崎郡市川町）、丹波からは、丹波足立氏の在所である佐治（現・兵庫県丹波市青垣町）や野坂（現・丹波市山南町）、また姫路の宇佐崎（現・姫路市白浜町）からも一人入集している。「当座」とあるからには興行の当日に集まっているはずで、当日の延応寺は生野地域内外から集まった数多の俳人で賑わったのだろう。

さらに④・⑤では文政元年に亡くなった文眠や、安登里・東湖の俳諧の師である名利庵葵、また文化十二年に亡くなった八千房二世・五竹庵木僊など、既に鬼籍に入った俳人たちの句を発句とした連俳と、亡人の発句を並べる。つまり『こがらし集』は、芭蕉追善興行であると同時に、親しい俳人の追善集としての性格も有していることがわかる。なお、文眠の発句は「過去帳」に「辞世」と記されたのと同句である。また、亡人の中には栗の本の俳人で新町（現・神崎郡福崎町）の俳人・五艸や、上田（現・加東市上田）の俳人・田旭の名もあり、生野俳壇と栗の本系俳人との交流をみてとることができる。

⑧の文音は、江戸の雅重を筆頭に、播磨・但馬・丹波の各地域のほか、小豆島・筑前・備前・摂津・京・大坂など、各地の俳人五十三名の句が並ぶ。雅重は「過去帳」にも記載のある結城五郎作（停雲舎雅重）とみてよい。結城は文化十四年頃に生野代官恩田新八郎の離任とともに生野を去ったと考えられるが、俳諧を通じた交流はその後も続いていたようである。

おわりに

以上、播磨・但馬の俳壇の活動も踏まえつつ、その狭間に位置する生野地域の俳壇、特に安登里が活躍した文化・文政期の俳壇について、地域に残された資料に拠りながら検討してきた。生野地域の俳人たちは、播磨・但馬の俳壇とも関わりつつ、停雲舎雅重や八千房といった、両地域とはまた異なる俳諧門流の影響を受けながら発展していった。その背景には生野銀山を抱えているといった地域的特性があつたと考えられる。生野地域の俳壇を考えるにあたっては、生野銀山を取り巻く状況、例えば雅重こと結城五郎作のような全国的な転勤経験を有する俳人の存在や、銀山の見学を求めて同地を訪れる文化人、銀山を出入りする人・モノの動きなどを重層的に捉えながら考察する必要がある。

本稿では、生野地域における俳諧活動を中心に検討したが、安登里を中心とした生野俳人たちの他地域との交流については十分な考察ができなかった。石川家には安登里宛の書簡や未調査の俳諧資料が多く残されている。これらの資料を調査・研究することによって、生野地域の俳壇の実態をより具体的に明らかにすることが可能と考えるが、そ

れは今後の課題としたい。

- 1 当該地域は但馬側に生野鉾山と銀山町があり、銀山町の播磨口番所に隣接する形で播磨国神西郡森垣村が存在した。銀山町と森垣村はそれぞれが異なる役割を担ってはいたものの、生野鉾山の運営を支えるという意味では一帯的に扱うべき地域であり、本稿では銀山町・森垣村を中心とした一帯を指す用語として「生野地域」を用いる。
- 2 「安登里」の表記は史料によって異なり、「阿登里」「安登利」「あとり」などと表記されるが、混乱を避けるため、本稿では引用を除き「安登里」に統一する。
- 3 富田志津子『播磨の俳人たち』和泉書院、二〇一〇年。「近世中後期の姫路の俳諧」（姫路市市史編集専門委員会編『姫路市史』第四卷、姫路市二〇〇九年）。「和歌と俳諧」（加西市市史編さん委員会編『加西市史』第二卷、加西市二〇一一年）、等。
- 4 姫路文学館編『百句繚乱 俳聖芭蕉を仰いだ人々―近世播磨の俳諧』姫路文学館、二〇〇五年。難波正司『播磨の俳句三百年史―芭蕉翁から永田耕衣まで―』常民学舎、二〇一九年、等。
- 5 兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県史』第五卷、一九八〇年。
- 6 大屋町史編集委員会編『大屋町史 通史編』養父市、二〇一〇年。
- 7 和田山町史編纂委員会『和田山町史』和田山町、二〇〇四年。川濱一廣「和田山町俳文学の系譜」（和田山町誌編纂委員会『和田山町の歴史』十五卷、一九九八年）。
- 8 柏村儀作「芭蕉翁碑趾出土品について」（『史談会会報』第一号、一九五六年。）松尾久雄「俳聖松尾芭蕉翁碑」（生野町文化財委員編『一里塚』十号、二〇〇三年）、等芭蕉塚・蓑塚についての論考が散見する。
- 9 今栄蔵編『貞門談林俳人大観』中央大学出版部、一九八九年。
- 10 姫路文学館編『百句繚乱 俳聖芭蕉を仰いだ人々―近世播磨の俳諧』姫路文学館、二〇〇五年。
- 11 「翻刻 芭蕉五十廻忌追善集『雪の棟』（富田志津子『播磨の俳人たち』和泉書院、二〇一〇年）。
- 12 「過去帳」石川家文書（91―28）。以降の「過去帳」は全て当該史料を指す。
- 13 難波正司『播磨の俳句三百年史―芭蕉翁から永田耕衣まで―』常民学舎、二〇一九年。

- 14 前掲注10。
- 15 前掲注8。
- 16 田中昭三編著『芭蕉塚蒐1』近代文芸社、一九九一年。
- 17 前掲注7
- 18 西谷豊編『但馬の近世俳諧』（私家版）、一九九九年。
- 19 『再発見 銀山の遺産―森垣村石川家に受け継がれてきたもの―』神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター、二〇一一年。
- 20 国書データベースの検索による。統一著者名は「あふひ」。
- 21 大河寥々『加能俳諧史』金沢文化協会、一九三八年。
- 22 石川準吉『生野銀山と生野代官―生野代官より勘定奉行に対する稟伺とその回答』日本工業新聞社、一九五九年、七一頁。
- 23 矢羽勝幸『書簡による近世後期俳諧の研究』青裳堂書店、一九九七年。後藤憲二・矢羽勝幸編著『俳人の手紙』正・続青裳堂書店、一九九三―一九九五年。
- 24 矢羽勝幸『俳諧あやめぐさ解題』NPO長野県図書館等協働機構／信州地域史料アーカイブ、<https://adeac.jp/shinshu-chitai/text-list/d100100-nh2400200/ht000010> (2026.02.16 最終閲覧)
- 25 伊藤善隆『「万家人名録」刊行前後―手銭有秀宛俳人書簡―』（『立正大学人文科学研究所年報』五七号、二〇一九年）。
- 26 伊藤善隆『俳人の肖像画付き住所録？ 万家人名録と俳諧の広がり（モノから読み解く江戸俳諧の黄金時代第十二回）』（『俳句』五九卷十三号、角川書店、二〇一〇年）。
- 27 室山京子（史料紹介）「草まくらにき」（1）―天保期の歌人小川真澄の旅日記―（『倉敷の歴史』三十五号、二〇二五年）。
- 28 蔵書の確認は『生野石川家 蔵書目録』二〇一八年、『生野石川家 蔵書目録Ⅱ』二〇一九年に拠る。石川家の蔵書は、近代に入ってから家人によって整理が行われているようで（拙稿『地域資料における書籍の整理・調査について―石川家蔵書整理の事例から―』（『歴史資料継承論叢』二号、二〇二五年）、本稿に挙げた俳諧関係の書籍が全てではなく、安登里存命時にはほかにも書籍があったと考えられる。
- 29 『俳諧真式伝』（石川家蔵書外①南18―15）。

- 30 「過去帳」(石川家文書91-28)。
 - 31 「月並句合と富田林」(富田林市史編集委員会『富田林市史 第二卷(本文編Ⅱ)』富田林市、一九九八年)。
 - 32 大屋町史編集委員会編『大屋町史通史編』養父市、二〇一〇年。
 - 33 石川家蔵書外①南6-3-17。なお、財団法人芭蕉翁顕彰会編『芭蕉翁記念館 芭蕉文庫目録 書冊編』(八木書店、二〇〇五年)にも『こがらし集』が採録されており、書肆情報に『こがらし集/半/二冊/文眠・安登里編/于辰堂蘭生序/安登里跋/「序」歌仙行「文政三庚辰十月十二日於龍上山延応寺興行」/絵入り/芭蕉翁追悼集/大坂松井忠蔵』とある。石川家に伝わる『こがらし集』と同じものと考えられるが、こちらは「二冊」とある。また「于辰堂蘭生序」については、「于辰堂八国生」の誤りと思われる。
 - 34 『青陽帖』(丁卯(文化四年)一七〇マ目。ジャパンサーチ掲載資料を閲覧(<https://www.dh-jacnet/db1/books/sakBK02-0090/portal/>)、『青陽帖』(文化戊寅)五二〇マ目。ジャパンサーチ掲載資料を閲覧(https://jsearch.go.jp/item/arc_books/sakBK02_0437)。こがらし集 2025.10.12 最終閲覧)。また閲覧に及んでいないが、他の年の『青陽帖』にも入集している可能性が高い。
 - 35 改造社編『俳句講座』第一巻、一九三四年、三六四頁。
 - 36 『増補淡窓全集』中巻、思文閣出版、一九七一年。「十四日 三位自魚町入塾 浪華俳師于辰堂八国生来訪。(十三年前。嘗相見於秋風庵)」。
- ※ 本稿は科学研究費助成事業基盤研究(C)「鉱山地域社会における人的ネットワークからみる豪農商の活動に関する基礎的研究」(課題番号22K00839)、および朝来市と神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターとの連携事業「朝来市域における古文書調査」の成果の一部である。
- ※ 本稿の執筆にあたり、石川家文書の所蔵者である石川道代氏には、資料の調査・閲覧・発表について多大なご理解をいただいた。また、古文書の解説については石橋知之氏(神戸大学大学院人文学研究科科学術研究員)、室山京子氏(岡山大学文明動態研究所研究員)の協力を得た。あわせて、本研究の遂行にあたっては、日頃から石川家文書整理会の参加者をはじめ、生野書院・朝来市教育委員会など、多くの皆さまにご協力いただいている。この場をお借りしてお礼申し上げます。